

2020年7月2日

放送倫理・番組向上機構
放送倫理検証委員会 御中

株式会社 TBSテレビ

放送倫理検証委員会決定後の取り組みについて

弊社は2020年2月13日、貴委員会の“TBSテレビ『消えた天才』映像早回しに関する意見”において「放送倫理違反があった」という判断を受けました。今回の事案について、貴委員会は意見書で「アスリートへの敬意を著しく欠き、スポーツを愛する視聴者の思いを踏みにじるような事態が、TBSテレビのスポーツ局制作の番組で起きていた」と指摘しました。弊社としては、その判断を真摯に受け止めております。

以下、今回の決定を受けた弊社の対応と取り組みについて報告いたします。

1. 委員会決定についての報道

弊社は2020年2月13日、委員会決定を受け、夕方の報道番組「Nスタ」および夜の報道番組「NEWS 23」において決定内容を伝えるとともに、弊社の「意見を真摯に受け止めております。番組制作に生かし、引き続き信頼回復に努めてまいります」とのコメントを放送しました（いずれも全国ニュース）。

また、このニュースはCS放送「TBS NEWS」でも計10回放送したほか、インターネットニュース「TBS NEWS」に2月13日から2月21日まで、9日間掲載しました。

（放送したニュース原稿）

BPO＝放送倫理・番組向上機構は、TBSテレビの番組「消えた天才」について、少年野球の投球を早回しして加工したのは「過剰な演出」だったと指摘。放送倫理違反があったとの意見を発表しました。問題の放送はTBSテレビのドキュメントバラエティ番組「消えた天才」です。去年8月の放送で少年野球の投手の映像を最大156%まで早回ししたほか、一昨年の放送では卓球のラリー、フィギュアスケートのスピン、サッカーのドリブルで実際のスピードの120%に加工していました。投球シーンを見た他の番組のディレクターが放送終了後「速すぎる」との印象を伝えたことがきっかけで問題が発覚。内部調査を行った結果、合わせて4件の早回し加工が見つかったもので、TBSはその後、番組の終了を決めています。一連の映像早回しについてBPOは「事実を曲げる手法は過剰な演出と言われてもやむを得ない」と指摘。「放送倫理違反があった」との判断を示しました。

TBSテレビは「BPOの意見を真摯に受け止めております。番組制作に生かし、引き続き信頼回復に努めてまいります」とコメントしています。

2. 委員会決定の社内周知

(1) スポーツ局内での取り組み

当該番組を制作したスポーツ局では、全ての社員が意見書の全文を読み、再発防止のための具体案を共有した上で、勉強会を実施しました。スポーツ局が制作する番組には、中継、ニュース、ドキュメンタリー、バラエティなどがありますが、それぞれの番組の特性により編集やチェックの環境といった制作プロセスが異なるため、勉強会は5月11日にスポーツ番組制作部、5月12日に業務推進部、5月14日にスポーツニュース部、5月21日に中継制作部と、各部ごとに実施しました。議論はそれぞれ1時間半以上に及び、いずれも活発な意見交換となりました。なお、新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、これらの会議はリモート形式で実施しました。

勉強会では、意見書が公表された日の記者会見で、放送倫理検証委員会の鈴木嘉一委員長代行が、今回の事案について「アスリートやスポーツで感動する思いへの冒涇だ」と厳しく指摘したことを伝えました。

意見書では、ブラックボックス化する編集過程における倫理をどのように考えるのか、また、映像加工技術の進展にチェックの仕組みをどう対応させていくかといった課題が指摘されましたが、これについて、勉強会では以下のような意見が出ました。

- ・再発防止策として、チェックに人数をかけることが考えられる。しかし、チェックするスタッフの人数が多くても、個人の放送倫理の感覚が鈍っていたら、誰も間違いに気付けない。個々のスタッフの放送倫理の感覚を向上させるしかない。
- ・番組の空気感が大事だ。ディレクターが迷った時や、指示に対して疑問を感じた時に、番組の責任者であるプロデューサーや演出を決める最終的な権限と責任を持つ総合演出に対して意見を言ったり相談したりできる環境や関係性を作る努力をしないといけない。
- ・技術革新にはメリットしか感じていない。PC上で映像編集ができるソフトの進化により、今までできなかったことが、短時間に一人でできるようになった。
- ・早回しは映像を見ただけでは見抜くことが困難だが、映像を加工した場合、PC上のシーケンス（編集記録）には加工したことを示すデータが残り、ソフトによっては色が変わるなど、加工の痕跡が一目でわかる。シーケンスをチェックする手順や技術を導入できれば、加工のチェック漏れが防げるかもしれない。

こうした議論を経て、再発防止のための論点は以下の2点に絞られました。

- ①個々の倫理観をいかに向上させるのか
- ②チェック体制をどう構築するのか

個々の倫理観の向上については、勉強会を定期的に関き、問題になった事例や手法について情報共有し、“クロ”ではないが“グレー”だと感じた手法についても議論を深めることが倫理観を高め、再発防止につながるとの認識で一致しました。また、風通しの良い組織を作ること、若手が発言しやすい空気をプロデューサーやディレクターが作っていくことが大事だと、ほとんどのスポーツ局員が考えていることが分かりました。

一方、チェック体制の構築については、スポーツ考査部の増員など、組織の強化に加え、新たな番組制作に臨むチーム作りの段階で、誰がどんなチェックを行うのかといった役割を明確にすることが大切であり、これを管理職の責任で実行していくことを確認しました。

勉強会を通して浮かび上がったもう一つのチェックの課題は、不正確な表現や事実と異なる表現をどう防ぐのかということです。「消えた天才」をめぐるのは、2018年12月3日の放送回で、プロ野球ドラフト会議に関連して事実と異なる伝え方をし、番組ホームページにお詫びを掲載した事案がありました。「わかりやすさ」を正義にして、本来伝えなければならない情報をカットしたり、正確なニュアンスを逸脱したりして、そのまま放送すると誤解を招きかねない内容がチェック段階で散見されています。これはディレクターが作ったストーリーに合わせるため、視聴者が理解しやすいストーリーを描くため、といった理由で起こっていますが、ディレクター自身に「悪意」はなく、番組を面白くしたいという制作者にとっての「善意」で行われているのが特徴です。こうした制作者都合ではなく、視聴者に対して「実はこうやっていた」と“種明かし”をしたときに、裏切られたと思われるようにすること、「視聴者ファースト」を常に心掛けることを確認しました。

なお、4つの部で行われた勉強会の議事録は、スポーツ局の社員全員で共有しました。

(2)「放送倫理委員会」での取り組み

「消えた天才」の事案が放送倫理検証委員会で審議入りすることが決まった後の2019年10月4日、社内組織である「放送倫理委員会」でこの事案を取り上げました。実際に放送された映像と元の映像素材を上映し、早回しが行われた経緯や背景をスポーツ局から説明した上で、再発防止に向けた議論を行いました。

また、決定通知後の2020年5月22日に開催した委員会では、意見書で指摘を受けたポイントについてコンプライアンス部から説明し、スポーツ局からは再発防止の取り組みについて説明しました。

放送倫理委員会は、編成局や法務・コンプライアンス統括室、報道局、制作局、スポーツ局、営業局などの幹部が放送倫理や人権にかかわる問題を社内横断的に討議する委員会で、この場での議論を通じ、決定の内容について全社的な周知を行いました。

3. BPO委員を招いて研修会を実施

2020年6月11日、放送倫理検証委員会の鈴木嘉一委員長代行と岸本葉子委員を招き、スポーツ局担当の取締役のほか、スポーツ局の全社員と主要な社外スタッフなど約70人が参加するリモート形式の研修会を実施しました。

鈴木委員長代行と岸本委員から、今回の意見書について、あらためて解説していただきました。両委員からは「早回し加工という確固たる手法があって、上からの指示によって受け継がれてきたものではなかった」、「早回しの大本は不安だった。VTRが本当に面白いのか何回も修正しているうちにわからなくなった」、「不安はどの番組を作る上でもつきもの。不安になった時に本件からの学びを心に留めてほしい」などの言葉がありました。

両委員との意見交換で、スポーツ局の出席者からは以下のような発言がありました。

- ・早回しがあった放送の直後に、視聴者からの指摘はなかった。チェックの目が多ければ防げたわけではない。
- ・事実を前提としたスポーツニュースを担当していて、実際の映像という事実を加工する発想がなかったので驚いた。制作者の倫理観の欠如が早回しにつながった。
- ・「消えた天才」は上に対して意見を言える環境ではなかった。チームの風通しが良くなかったことが原因の一つ。
- ・プレビューの冒頭に、放送倫理に違反する加工はないか、その都度確認することが再発防止には効果的だ。
- ・現場取材をしていない総合演出は、自分の指示が、アスリートと向き合っている取材ディレクターに負担をかけていないか、相手をよく見ながらコミュニケーションを取るべき。
- ・今回の問題の背景に、意見書の中で多くのページ数を割いて指摘されている「技術革新が映像加工への心理的ハードルを下げた」ことや、それに伴う「チェックの仕組みの限界」があったかもしれないが、主たる原因は制作者の倫理観の欠如にある。

これに対し、両委員からは以下のような意見がありました。

- ・早回しをしたスタッフに悪意は全くなかった。ある意味で非常に熱心だった。問題は熱心さの方向だ。番組自体はオリジナリティが高いだけに残念だった。
- ・誰がやったかではなく、背景にどんなことがあったのかを検証することが大事だ。
- ・意見書では事案の環境的要因に言及したが、皆さんが環境のせいにしていないことを大変心強く感じた。あくまでも個人の倫理観の問題だと最終的に感じてくれたことを頼もしく、嬉しく思う。

意見交換会では、スポーツ局員から、編集ソフトに映像加工の痕跡が残ることに着目した、シーケンス（編集記録）のチェックという方法について提案がありました。これにより、映像の不正な加工を発見したり、抑止したりする効果は期待できるものの、より多くの頻度で発生している、文脈上の誤りや事実と異なる表現を防止することにはつながらないことなども報告されました。

4. 番組審議会への報告

2020年2月17日に開かれた番組審議会で、編成局長から委員会決定の内容と弊社の対応について報告しました。

番組審議会では、これまで3回にわたり、「消えた天才」の早回し加工について報告を行っています。また、弊社が2019年に放送した番組全般について審議した2019年12月16日の番組審議会では、委員から『消えた天才』『クレイジージャーニー』とTBSから続けざまに不適切な演出が発覚したことに関しては、社内で検証が行われていると思うが、続けて起きたことは偶然とは思えない。おそらくテレビ全般に起きているのではないかとこの意見が出されました。

5. 「放送と人権」特別委員会での議論

「放送と人権」特別委員会は弊社が外部の有識者を招いて、放送倫理や人権にかかわる問題について意見を求めるもので、非公開で行われています。2019年11月11日に開かれた委員会では、「消えた天才」の映像早回しについて、様々な観点から議論を行いました。この議論は、問題の本質をより深く理解し、共有する上で有意義なものとなりました。

6. 再発防止への取り組み

スポーツ局では、再発防止に向け、以下のような取り組みを始めました。

- ・放送倫理の向上を図るため、定期的に社内勉強会を行う。
- ・素材段階でのチェックを強化する。
- ・“密室”でのVTRチェックを禁止する。
- ・スタッフを孤立させない組織作りを行う。

スポーツ局では、2019年9月に貴委員会でこの事案が審議入りした直後に、何が問題だったのかを議論する勉強会を3回実施しました。全てのスポーツ局の社員と外部の制作スタッフ約300人が、「消えた天才」の早回し加工が行われた4つのコーナーを視聴し、

事実を曲げる手法を用いることは、スポーツドキュメンタリーの視聴者を欺くことになると確認した上で、過剰な演出をどうやったら防げるのかについて議論しました。同時に、問題が起こったからといって、萎縮するのではなく、番組制作者は、どうしたら番組が面白くなるのか、どうしたらスポーツの感動が伝わるのか、考え抜かなければならない、とのメッセージをスポーツ考査部長から出席者全員に伝えました。

今後も、放送倫理上問題があった事例について定期的に勉強会を行っていくほか、各部から“危なかった事例”や“判断に迷った事例”などを吸い上げた上で、意見交換を行うなどして、再発防止の効果を不断に点検し、改善を図ってまいります。

7. 総括

スポーツの感動を視聴者に伝えるプロであるはずの制作者たちが、「実際の映像」に早回し加工を繰り返し、視聴者を欺いてしまいました。

この番組ではこれまで、超一流アスリートのライバルであった「消えた天才」がいかに優れた選手であったかを視聴者に見ていただくため、「実際の映像はこちら」というナレーションの後に、そのライバルの活躍ぶりを伝える貴重な映像を紹介してきました。

コンマ何秒の世界での切磋琢磨にアスリートの神髄があり、アスリートの能力や努力に対するリスペクトが番組の根幹でした。その「実際の映像」を早回し加工をすることは、視聴者の信頼を裏切る行為であり、絶対にあってはならない手法だと考えています。スポーツバラエティに区分けされる番組であっても、視聴者は事実在即した「スポーツドキュメンタリー」として見ているからです。

貴委員会の意見書は、以下のように締めくくられていました。

「技術革新が下げた心理的ハードルは、個々人のモラルによって押し上げ、保たなくてはならない状況にある。大きな課題を抱え込んだ状況だが、技術の進歩は善くも悪くも後戻りしない。そうした時代に番組を作っていることを制作者が認識し、最善を尽くすことを願っている。」

今回の意見書は、技術革新が進む中、スポーツ番組に携わる制作者の放送倫理の感覚を見つめ直す貴重な機会となり、制作者同士が様々な意見を交わすきっかけになったと考えております。貴委員会のメッセージに応えるためにも、スポーツ番組は、視聴者との了解の上で成り立っていることを忘れず、スポーツの魅力を伝えるテレビの力をあらためて印象付けられるスポーツ番組を目指し、全力で番組制作に取り組んでまいります。

以上